

研究種目：若手研究(スタートアップ)
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20830053
 研究課題名(和文)
 雑誌・情報誌産業におけるケイパビリティの研究

研究課題名(英文)
 Analysis of project organizations in the case of magazine industry
 研究代表者
 神吉直人(KANKI NAOTO)
 香川大学・経済学部・講師
 研究者番号：90467671

研究成果の概要(和文)：本研究は、雑誌編集におけるプロジェクト組織のマネジメントに関するものである。主に京阪神エリアで発行される雑誌編集者を対象としたインタビューデータを蓄積し、その知見をワーキングペーパーにまとめた(現在、査読付論文に投稿・修正中)。ここではプロジェクト組織のマネジメントに際して、ベストメンバーの選択には編集者によるネットワークの活用が有効であること、そして成員のコミットメントを引き出すことに対しては組織の価値観を編集者が体現することが必要であることを示した。また、行為者間の関係性を対象とする分析手法であるネットワーク分析に関して、これを経営学に応用する際の問題点を検討し、留意すべき点を指摘した論文を著した。

研究成果の概要(英文)：In this study, we undertook an investigation into project management of organizations consisting of magazine editors and free-lance writers. We collected interview data from editors working in publishing, operating chiefly in the Kansai area. These findings are written in a working paper. The paper's main findings are twofold. First, successful editors use their network when choosing project members. Second, successful editors motivate their co-workers by personifying their organization's philosophy.

Then, we examined some poignant aspects of network analysis in management theory and wrote a full paper.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	950,000	285,000	1,235,000
2009年度	760,000	228,000	988,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,710,000	513,000	2,223,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経営学・経営学

キーワード：プロジェクト組織、ネットワーク分析、文化コンテンツ産業

1. 研究開始当初の背景

“コンテンツビジネス振興を国家戦略の柱とする”ことを掲げる知的財産戦略本部が内閣に設置されたことに代表されるように、近年、文化コンテンツ産業の国際競争力強化が進められている。この分野における知見を蓄積することは、本研究の応募時から現在も変わらず重要な課題と位置付けられる。文化コンテンツは、天賦の才能を持った個人によって生み出されるものであると考えられる（また、実際そうであることが多い）。この点より、文化コンテンツの生産は経営学の文脈では扱いにくいものである。しかし、本研究では、経営学、中でも特に組織論の観点から、優良な文化コンテンツを組織的に、また継続的に作り出すためのマネジメントについての考察に挑戦することを企図していた。

さらに、そのようなマネジメントにおける人と人との関わり、つながりを計量できる分析ツールであるネットワーク分析について、これを経営学への応用する際の問題点を検討することも当初から課題として挙げられた。

2. 研究の目的

本研究は、文化コンテンツの生産に用いられるプロジェクト組織*のマネジメントにおける課題である、ベストメンバーの選択の困難さと彼らのコミットメントを引き出すことに対して、巻込能力の概念枠組みを構築し、その量的分析を実施することを目的としていた（*申請時はネットワーク組織としていたが、事象をより正確に捉えるためプロジェ

クト組織に改めた）。これは、プロジェクト組織のマネジメントに関する議論が、「プロジェクト組織とはどのようなものか」に関するものに集中しており、「プロジェクト組織を実際どのように運営するか」に関してはあまり述べられてこなかったことによる。

概念枠組みの構築については、既存のケイパビリティ概念に依拠し、巻込能力に関する要素分析を行うことを目指した。これは既存経営学に対してケイパビリティ概念に関する理論を拡充することであった。一方、後者の量的分析では、雑誌・情報誌産業における編集者とライターの協働関係ネットワークを明らかにすることを試みた。これは、まだ端緒にすぎたばかりである経営学におけるネットワーク分析の応用に関する実証研究の事例を追加することを意図していた。

3. 研究の方法

プロジェクト組織におけるマネジメントの実例を知るため、参与観察、およびインタビュー調査を行った。参与観察は、(株)京阪神エルマガジン社（大阪市）の『Meets Regional』編集部を対象とした。当初は2年を予定していたが、研究代表者の勤務地が変わったことで、最初の1年しか行うことができなかった。インタビューは、同誌編集者や同社内の他誌の編集者を対象に行い、観察で得られた知見を補うことを意図していた。合わせて、東京に編集部のある他誌の編集者や、プロジェクトのマネージャー的な働きをしている家電製品のプロダクトデザイナーにもインタビューを行った。これらは共に議論

の一般性を確保するためであった。

次に、プロジェクト組織における関係性（編集者とライターの協働関係ネットワーク）を定量的に分析するため、ネットワーク分析を行った。ここでは特に、ネットワーク分析に関する体系的な教科書である Wasserman and Faust (1994) などの文献を参照しながら、計算ソフトである UCINET の手法に関する理論的理解を深めつつ、この手法を経営学に応用する際の問題点について、京都大学大学院生の中本龍市氏と議論を重ねた。

【参考文献】

Wasserman, S., K. Faust (1994) Social Network Analysis, Cambridge University Press.

4. 研究成果

(1) 雑誌編集におけるプロジェクト組織のマネジメントの研究

文化コンテンツ生産に用いられるプロジェクト組織のマネジメントに関して、参与観察とインタビューから得られた知見をワーキングペーパーにまとめた。ここではプロジェクト組織のマネジメントに際して、ベストメンバーの選択には編集者によるネットワークの活用が有効であること、そして成員のコミットメントを引き出すことに対しては組織の価値観を編集者が体現することが必要であることを示した。現在、査読誌に投稿・修正中で、残念ながら期間内に論文の形で公開することはできなかった。しかし、修正する過程で、プロジェクト組織における暗黙的知識の形式化に関する記述を進めている。これは、同論文の査読担当シニアエディターとのやり取りの中で、巻込能力の概念枠組みを整理する前に、まず雑誌編集のプロジェクト組織で実際に起こっていることを丹念に記述することが必要であるという指摘

を受け、それに従うことが有意義であると考えたことによる。このことは経営学において、非常に重要であるものの困難とされる「創発性に関する事例の記述」の試みであり、大きな成果が期待される。また、申請時に予定していた概念枠組みの構築は今後の課題として残っており、具体的な成果は得られていない。

(2) デザインに関するプロジェクト組織のマネジメントの検討

議論の一般性を確保するため、雑誌編集と同じくプロジェクト組織による製品開発を行っている家電製品のプロダクトデザイナーにインタビューを実施し、その結果を学会などで報告した。ここでは、携帯電話端末の開発において、デザイナーが技術的知識を理解し、デザインと技術の統合を担っていることがわかった。これは、MOT（技術経営論）における重要概念である重量級プロジェクトマネジャーの議論に幾分かの示唆を与えるものであった。

(3) ネットワーク分析の技法—ネットワーク分析の経営学への応用について

プロジェクト組織でのコミュニケーション構造に関する量的分析の技法として、ネットワーク分析がある。この技法を経営学に応用する際の問題点に関する研究を行った。まず、文化コンテンツ産業を対象としたネットワーク分析でよく用いられる Affiliation Network の手法が、同分析の重要概念である構造的空隙の計測には不適切である可能性を指摘し、ネットワーク分析に関する国際学会（INSNA:米・サンディエゴにて開催）で報告した。

また、ネットワーク分析を経営学に応用する際の留意点を論文にまとめた。これは、ネットワーク分析を経営学に応用する際に生じる疑念に対して、その違和感を明示し、論

点の整理をしたものである。具体的には、経営学者からネットワーク分析に対して向けられる疑念は、因果図式の問題と構成概念と指標に関する妥当性の問題（内的妥当性と構成概念妥当性）に着目することで整理できることを示した。これらを今後さらに整理・発展させることは、組織内のコミュニケーションを量的に捉える研究の蓄積に寄与しうると期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

① 神吉直人・中本龍市「ネットワーク分析の経営学への応用に関する一考察：因果図式、および妥当性の検討の必要性」『香川大学経済論叢』第82巻，第3号，pp.199-210，2009年，査読無

② 神吉直人「価値観の体現とネットワークの活用によるプロジェクト組織のマネジメントー雑誌A誌の編集事例ー」『神戸大学経済経営研究所Discussion Paper Series』No. J99，p14，2008年，査読無

〔学会発表〕（計6件）

① 中本龍市・神吉直人「ネットワーク分析の経営学への応用と問題点」日本経営学会第83回大会，2009年9月2日，九州産業大学

② 神吉直人「意味的価値の創造につながるデザインと技術の統合」組織学会 2009年度研究発表大会，2009年6月7日，東北大学

③ Ryuichi Nakamoto, Naoto Kanki, “Structural Holes in Affiliation Networks” The International Sunbelt Social Network Conference 29th, 2009年3月13日，Bahia Hotel Mission Beach; San Diego, CA

④ 神吉直人「強力な個性によるデザインと技術の統合」日経企業行動コンファレンス，2008年12月5日，富士教育研究所

⑤ 山田仁一郎・神吉直人・山下勝「映画産業の製作者ネットワークの検討ー社会ネットワーク分析の応用とソーシャルキャピタルー」組織行動科学学会第11回年次大会，2008年11月9日，中部大学

⑥ 神吉直人「競争優位の源泉としての工業デ

ザイン - A社の携帯電話端末の外装デザイン開発事例」組織学会 2008年度研究発表大会，2008年6月8日，神戸大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神吉直人 (KANKI NAOTO)

香川大学・経済学部・講師

研究者番号：90467671